# 大衆文学大系

野村胡堂
子母澤寛
川口松太郎

大衆文学大系19　野村胡堂　子母澤寛　川口松太郎　集
昭和四十七年十一月二十日　第一刷

著者　野村胡堂　子母澤寛　川口松太郎
装幀者　田中一光
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)振替東京三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定価　二八〇〇円
©松田稔子　梅谷龍一　川口松太郎　一九七二年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0393-136198-2253 (0)　(文2)

# 目次

野村胡堂集
甲武信ヶ嶽伝奇　五
銭形平次捕物控　一五〇
子母澤寛集
突っかけ侍　二四七
弥太郎笠　四二〇
川口松太郎集
蛇姫様　三三五

鶴八鶴次郎　七六四
解説　七八三
解題　七九二
年譜　七九五

# 野村胡堂集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 甲武信ケ嶽伝奇

## 武田菱の脅迫

「先生。」
「何んじゃな、伊太郎。」
「先生ほどの腕になると、この世に怖い者がなくなりましょうな。」
浅草小揚町の人足頭、文七の伜伊太郎は、剣術の師匠設楽七十郎をつかまえてこんな事を訊ねるのでした。
「ハッハッハッ、いしくも問うたりな伊太郎、憚りながら設楽七十郎、生れてからまだ怖いと思ったことがないよ、遠き昔の荒木又右衛門、宮本武蔵は知らず、天下広しと雖も、この七十郎に勝つ者は先ずないな。」

それは本当でした。設楽七十郎、当時江戸の町道場では評判の使い手ですが、大酒を呑んで駄法螺を吹くので、誰も話半分にしか聞いてくれません。年の頃四十二三歳、総髪に七つ下りの素袷一枚、腰のものだけは物々しいが、まことに気の置けない仁体だったのです。
「天下無敵と仰しゃる先生が、三本に一本あっしに取られるのは何ういうわけで？」
伊太郎はこんな事までツケツケ言います。これは二十一二、口は悪いが、人柄のおっとりした、美男ではないが、妙に人好きのする、若さと覇気と、善意と悪戯ッ気とこね合わせて、それを魅力にしたような、とてもたまらない皮肉な男ッ振りです。
「これこれ師匠に向って無礼なことを言うな、あれは、程よくあしらって居るのじゃ。」
「ヘエ――気を入れると、三本のうち二本は取れそうに思われてなりませんが、あれも矢張りあしらって居るんで。」
「その通りだよ、弟子は師の半芸に及ばずと言うではないか。」
「それじゃ、ちかごろ御内府を騒がす怪盗武田菱と先生と、何方が強いでしょう。」
「それは拙者のほうが強い。」
設楽七十郎、躊躇を知らぬ男です。
「その武田菱が、あっしの親父を脅かして居りますが、先生のお力を拝借できませんか。」
伊太郎は、此処まで釣って来て、とうとう本音を吐いたのです。
「武田菱が？　お前の親父を？　おかしなことを聴くものだな、お前の親父は、武田菱に狙われるほどの金でも持っているのか。」

「金なんざありゃしません、有るのは借金ぐらいのもので。」
「それじゃ、何を狙っている。」
「天正年代の古い巻物を持っている筈だ、それを渡せ、渡さなければ命をもらう——と言うんで。」
「フーム。」
「幸いその脅かしの手紙はあっしの手に入りました、親父に見せると心配するから、そっと隠して置きましたが、——何うしたものでしょう先生。」
「フーム。」
「脅かして置いて盗みに入るのが、武田菱の手口だって言うでしょう、武田菱がおし込んで来たとしてあっしの腕で退治できるでしょうか、先生。」
伊太郎の話は次第に真剣味をおびて来ます。
「それは危い。」
「正直のところを言うと、武田菱は先生よりも強いんじゃありませんか。」
「これこれ無礼なことを言うな、どうもお前は弟子のくせに口が悪くていかぬ、——如何にもお前の腕前は近頃あがった——しかしそれは棒振り剣術のお座敷剣術で、実戦に臨んでは大した役に立つものじゃない。」
「すると、先生は役に立たない剣術を教えたわけで——」
「えい黙らぬか、俺はほんとうに怒るぞ。」
「ヘエ——」
「のう、伊太郎、剣の妙は技より心だ、胆力が据らなければ真剣の立会に勝てぬ、——まして武田菱は剣槍両道の達人で、忍術もよくすると言うではないか。」
「でも、多寡が泥棒でしょう。」
「泥棒にもピンからキリまである——兎に角、それは危い、お前の親父が武田菱に狙われているのを放っても置けまい。お前の親父には内密で、今晩から俺が行って、そっと泊ってやろう。」
「それは願ってもない幸いですが、酒が減ると、直ぐ親父に知れますよ。」
「ハッハッハッ、いやに先を潜って話す男だ、どうせ樽だろう、一合酒を取ったら一合、一升取ったら一升水を入れて置け。」
「先生が五日も泊っていたら、一斗樽がみんな水になってしまいます。」
「構わぬ、そうなったら、酒屋から一升ずつ買って来い。」
どうも手の付けようがありません。
が、二人はこう言った仲の師弟でした。下谷竹町の道場を立出でて、小揚町へフラリフラリと歩いて居ります。
時は享保九年四月、こんな呑気な具合に、驚天動地の話は端緒を開くのでした。

## 浅草小町の災難

眼には満街の青葉、山杜鵑も聞えたその頃の江戸の初夏は、清々しくも美しいものでした。
わずかに残る夕明りを背負って、竹町から小揚町へ、師弟の歩みは長閑にも寛々たるものです。
「伊太郎、お前はたしか二十一だな。」
「ヘエー。」
「もう嫁を取ってもいいと思うが何うだ。」

「気に入ったのは向うで来てくれず、絡みついて来るのは此方で御免蒙りたくなるから、手頃なのはありゃしませんよ。」
「ところがある。」
「ヘエー、何処の御姫様で？」
「お姫様は大きく出たな、――身分は町人だが、心掛と容顔は大したものだ。」
「先生が見つけるんだから、いずれ小格子の中にいる腹の減った狐見たいなのか、柳原で莫蓙を抱えているお姫様でしょう。」
「お前はどうも口が悪いな、男ッ振りは好いが、そう口が悪いと人に嫌われるぞ。」
「親父も毎々そう言いますよ。」
「ところで、その娘というのは、それ、向うの路地の裏にいる――浅草小町と言われる美女だ、知っているだろう。」
設楽七十郎は手を挙げて、門前町の、とある路地を指しました、通りすがりにフト思い出したのでしょう。
「刺青師久助の娘お美乃でしょう、あれはいけません。」
「よく知って居るな。」
「江戸中の娘は、みんな親類見たいなもので、――よけて通るのに骨が折れますよ。」
「馬鹿野郎、なんと言う口をきく。」
「ヘエ、それは嘘で、だが、あの久助の娘はいけません、親同士が昔懇意だったくせに、近頃は顔を見ても口を利きません、よっぽど気に入らねえことがあるようで――」
「どうして仲直りをさせないんだ、あれほどの娘を手に入れるには、若い男は一と苦労してもいいな。」
「御免蒙りましょう、そんな苦労は修業の毒で、あっしは当分娘と海鼠を断ちましたよ。」
「娘と海鼠を一緒にする奴があるか。」

そんな話に興じながら、丁度娘の住んでいる路地の入口まで来た時でした。
「あれーッ。」
帛を裂くような若い女の悲鳴と一緒に、宵闇の路地のなかから、バラバラッと飛びだしたのは、四五人一団になった曲者、七十郎と伊太郎を突飛ばすように、街のなかへ――。
見ると曲者どもの肩の上には、ほの明るい夕空に躍って、若い女が一人、悩ましくも争い続けているのです。
「伊太郎、女を救えッ、浅草小町だ。」
設楽七十郎、ベイロシャの駄法螺吹きのようでも、締釘が確りしているせいか、いざとなると強いところがあります。
「応ッ。」
飛びこんだ伊太郎、大手を拡げて行手を阻む曲者の一人を、襟に手がかかるともんどり打たせました。
続く一人は白刃、闇を劈いて真っ二つになれと斬りかけるのを、伊太郎も長いのを引っこ抜いて、チャリンと合せます。火の出るような激しい気力。
「伊太郎、遠慮するな、斬ってしまえッ。」
「合点ッ。」
驚いて飛び退く曲者、それを追い討ちにサッと払うと、袂が一つ、バサリと斬られて、蝙蝠のように空に舞います。
「その娘を奪えッ、俺は家のなかを見て来る。」
設楽七十郎は、路地の奥の家のなかに事ありと見たのでしょう。そのまま飛び込もうとする鼻の先へ、
「――」
黙って立っていたのは、曲者の殿を勤めた、覆面の大男です。
「その武家が、――その武家が父さんを――」

曲者の肩の上に、必死と身を揉みながら、娘はこう叫びつづけます。

闇にも匂う娘は、お美乃に間違いもありません、その父親の久助は、多分この覆面の武家に斬られたと言うのでしょう。

「よしッ、敵は討ってやるぞ」

設楽七十郎、一刀の柄に手をかけると見るや、曲者の兇刃は早くも伸びて、その胸のあたりを、斜っかいにスーと撫でて去ります。

陽炎の動くような非凡の手際、七十郎も思わず一歩しりぞきました。

「先生ッ――助太刀しましょうか。」

と伊太郎、

「かまわず娘を追えッ、この化物は、おれが三枚におろしてやる。」

七十郎、この期に臨んで洒落を言っているのです。

「――――」

覆面の曲者はたたみかけて斬りこんで来ました。二た太刀、三太刀、紫電風もなく動いて、その物騒さと言うものはありませんが、設楽七十郎さすがに江戸の評判男でした。一刀を青眼に構えたまま、器用にうごく対手の太刀筋を睨んで、フーッと酒臭い息を吹きかけます。

「大分いけるな、――が邪悪な剣法だ、――俺に逢ったのは災難というものさ、――他のものなら斬られるかも知れぬが、ゲープ。」

「――――」

「真の剣法はこうするのだ、それよ、エーッ。」

実に神来の快剣です。覆面の曲者は、辛くも飛退きました。が、凄じい気合に蹶られて、妖蛇のように動く剣も封じられたものか、そのままジリジリと下って闇のなかへ。

「これこれ逃げる気か、卑怯だろう、――ハッハッハッハッ、目先の見える奴だ、もう一合すると、お前の覆面が裂かれ、二合すると、その喉笛に穴があく、――ゲープ、俺はもう三合ばかり欲しいよ。」

他愛々々、青眼に構えた刀がダラリと落ちて、切尖が大地を嘗める頃、覆面の曲者は、何処へ行ったか、その辺には見えません。

「逃足の早い奴だ、――が、相当に使えるぞ、改めて勝負をしよう、下谷竹町の道場へ何時でも訪ねてこい、設楽七十郎、改めて相手をするぞ。」

闇のなかへ、こう言い残すと、路地の奥へはいって行きました。予て知っているらしく刺青師久助の家、覚束ない灯にすかして見ると、入口の二畳に、五十歳前後の男が一人、袈裟がけに斬られて虫の息になって居ります。

## 怪少年の悪戯

「これ、確かりせい、傷は浅いぞ。」

手負いを抱き起して見ましたが、思いの外の深傷、もとより助かる見込はありません。

「娘は？　お美乃は？」

手負いは辛くも顔を振り上げます。空ろな眼、わなわなく唇、次第に死の色が濃くなって、そう言ううちにも、がっくり落込みそうです。

「娘は助けてやる、安心せい、――敵は何者だ。」

七十郎の声に励まされて、断末魔の老人の指は、行燈を指しました。
「お。」
行燈には血潮で描いた武田菱が一つ。
「武田菱と名乗る曲者――」
「いや違う、――武田菱の手際ではない。」
「――――」
「他に言うことはないか。」
「あれを娘に――台所の揚板の下――」
「これ、そこに何がある、確かりせい。」
七十郎は後から抱き起しましたが、もはや息絶えて、がっくり、血潮のなかに崩折れます。
設楽七十郎は、久助の死体を片手拝みに、そのまま台所に飛込みました。
揚板をハネ上げると、糠味噌と炭俵と、沢庵石との間に、小さな箱が一つ、取りあげて見ると、五寸に八寸ほどの小さいものですが、油紙でつつんで、紐をかけて、そのうえへ封印までした、おそろしく厳重なもの、手早く紐を解いて開けようとすると、
「あッ。」
お勝手の油障子を突き破って、手頃の礫が一つ、危うく七十郎の鬢をかすめます。
「誰だッ。」
立ちあがったところにまた一つ、今度は袖を叩き、続く一つは膝頭へ――、障子の外から投る礫では、如何なる名人でも防ぎようはありません。
「己れッ。」
障子をサッと開けると、路地の中程に踞んだ十二三の小僧、雀の巣のような頭をして、尻切半纏を着たのが、さすがにびっくりして起ち上りました。
「やーい、三ピン、もう二三十おいらの礫を喰って見るか。」
「何を、小僧。」
言う鼻の先へ、風を剪って第四の礫、どんな手練があったものか、設楽七十郎も避けるのが精一杯です。
「やい口惜しかったら此処まで来い、附合って遊んでやるぜ。」
「己れッ。」
設楽七十郎、誘われるともなく外へ出ました。路地の闇から、際限もなく礫が飛んでは、さすがに放っても置けなかったのでしょう。
「石はうんとあるぜ、――それよ。」
「小僧、ふざけるな、斬るぞ。」
「逃げるよ、三ピン。」
「待て待て。」
この小僧に、何んな仔細があるのでしょう、事件があまり重大そうなので、設楽七十郎、思わず路地の外まで追いすがりました。

## 妖婆は未来を語る

一方伊太郎、三味線堀まで曲者を追いつめて、二人に傷を負わせ、二人を下水にたたきこむと、残る一人は、かなわぬと思ったか、
「覚えていろ。」
お美乃を残して逃げ出します。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ハッハッハッ、弱い曲者だ。」
一刀を納めて、娘のそばに駈けより、崩折れた両脇へそっと手を入れました。
「怪我はなかったかい、――飛んだ災難だが、もう大丈夫だ。」
「有難うございます。」
上げた顔、宵闇にも匂う浅草小町の、不思議な魅力に驚いたものか、伊太郎は思わず手を放しました。
多寡が刺青師の娘、――親父の友達の娘――と思っていたお美乃は、闇のなかの牡丹のように、妖しくも伊太郎の腕のなかに匂うのです。骨細のしなやかな体、どんな香料よりも、高雅で魅惑的な処女の体臭、ぼかされたような白い温かい頬、黒燿石の眼、紅い小さい唇、――それ等の一切が渦を巻いて、曾つて女に許した事のない、伊太郎の心をそそのかすのでした。
「あッ。」
もう一度、崩折れそうな処女お美乃、その体を引寄せて、
「何うした、――何を驚く。」
差覗くと、
「あれは？　あれは？」
お美乃は伊太郎の懐中に顔を埋めて、ワナワナと顫えているのです。
何心なく振りかえると、丁度、伊太郎の後へ、出たばかりの月を満面にあびて、静かに静かに立っているのは、針のような銀髪を頂き、昆布のような襤褸を引っかけた、枯木に魂を吹き込んだと思われる老婆ではありませんか。
「可愛や、一目惚れをしやった喃、フアッ、フアッ、フアッ。」
と二人を指して笑うのです。
「何んだ、手前は。」
ハタと睨む伊太郎。
「その娘の血筋には、呪がかかっているぞよ、のう若いの、その女にかかり合うたが最後、身の破滅じゃ、悪いことは言わぬ、捨てて帰るがよいぞ。」
老婆の手があがると、怖れおののく処女の額を指すのです。
「何を言やがる。手前のほうが余っぽど呪のかかった面だぜ。」
「フアッ、フアッ、フアッ。」
「気色の悪い婆アじゃねえか、フアッ、フアッだっていやあがる。消えてなくならねえと、叩ッ斬って、狸汁にするぜ、どうせ天道様にあたりゃ、尻尾を出す代物だろう。」
伊太郎は脅かすつもりで、長いのの柄をトンと叩きました。
「何を言うぞえ、若えの、この婆アを斬ろうと言ったって斬られるものかい、――信玄様の昔から太閤の天下、家康の関ヶ原、大阪陣、徳川八代の栄華まで百五十年の世の変遷を、この眼で見て来た婆アじゃよ、十九や、二十歳の、雛っ子に斬られると思うか、阿呆な小僧じゃ、フアッ、フアッ。」
「――――」
さすがの伊太郎も、この幻怪不思議な婆アには、斬りこむ隙がありません。お美乃の五体から発散する、処女の魅力にも悩まされましたが、この老婆をつつむ一種の幻気には、全く近づくべからざる妖しい力があります。
百五十年生きたというのは、それは大嘘でしょうが、少くとも常人にはない一種の精神力の持主で、水火も刀槍も、容易に傷つけることができない術を心得ているのでしょう。
折柄軒を縫い、庇を渡って、巨大な蝙蝠のように飛んで来た一つの黒い影、
「お婆。」
ポンと道の真んなかに立って、腰骨に両手をあてたのは、先刻、設楽七十郎を煙に巻いた、十二三歳の怪少年です。

「お、三ぶか、首尾はの？」
「いけねえ、今日は散々だ、あの三一が滅法強いぜ。」
少年の指した後からは、設楽七十郎、息せき切って飛んで来ます。

## 死骸の背

七十郎と伊太郎とお美乃は、心も空に門前町の路地に引返しました。
恐ろしい昂奮と、不安と、圧迫感に、もう七十郎も無駄を言う気力はありません。
「お、誰か荒した様子だ。」
先刻とは大分様子がちがいます。仰向けにして置いた久助の死骸が、誰の仕業か俯向にされて、近々とよせて行燈の灯に、世にも恐ろしい情景がマザマザと照されていたのです。
「あッ、――お前さんは見ちゃならねえ。」
伊太郎はあわててお美乃の前に立ち塞がりました。俯向にされた久助は、着物をすっかり脱がされた上、背中の皮――腰骨のうえの部分を半紙で半枚ほど、剝ぎ取られているではありませんか。
人間の皮を剝ぐとは、聞きも及ばぬ残虐な仕業です、どんな鬼畜が、どんな望みがあってしたものかわかりませんが、伊太郎は思わず、お美乃の前に立ち塞がったのも無理のないことです。
「いえ――逢わせて下さい、驚きもどうもしません、お願いですから一と目。」
お美乃は伊太郎を掻き退けました。父親の斬られるのを見たくらいですから、大方死んだものとは覚悟して居りますが、このまま顔も見ずに葬られなかったのでしょう。
「気を確かり持つのだぜ。」
「父さん。」
伊太郎が退くのと、お美乃が飛びつくのと、一緒でした。が、背中の皮を剝がれた父親の死体を見ると、
「あア。」
お美乃は、さすがに仰け反ります。
「だから言わねえこっちゃ無え、先生、水だ。」
「よし来た。」
気軽に台所へ飛込んだ設楽七十郎、
「た、大変ッ。」
此方にもまた一と騒動もちあがった様子です。
「其方には何があるんで、――先生、蚯蚓の死骸じゃあるまいね。」
伊太郎、相変らず悪い口です。
「此方では物がなくなったよ、――手負に教わった箱、――揚板の下から取出したまま、小僧を追い廻しているうちに、なかは空っぽだ。」
紐を切って、油紙を破って、中身を抜いた箱を持って、設楽七十郎、物の怪につままれたように帰って来ます。
「先生、水は？」
「あ、忘れた。」
引返して水瓶から、柄杓で一杯、お美乃の口に含ませると、処女は、さすがに気づきました。
「父さん、誰が、誰が、一体こんな惨たらしい事をしたんでしょう。父さん。」

お美乃は、父の死骸に取りすがって、心のままに泣き入るのです。
「ね、お美乃さん、大事の場合だ、泣いていちゃ解らねえ――この背中には何があったんだ。」
「――――」
「あっしは小揚町の文七の伜伊太郎、怪しい者じゃねえ、親同士が知合なことは、お前も知っているだろう。」
「――――」
お美乃はわずかにうなずきます。浅草に住んでいて、伊太郎を知らない娘があって宜いものでしょうか。
「この背中に何があったんだ?」
「父さんは、人に見せないように隠していましたが、何んか不思議な刺青がありました。」
拭いても拭いても湧く涙の下から、せぐり上げせぐり上げ、お美乃は言うのです。
「それッ切りか。」
「――――」
伊太郎も変な心持になりました。自分の父久助とは若いころ無二の仲だった文七――にも、同じ腰のうえに、得体の知れない刺青があるのです。
「この箱のなかに何が入っていたんだえ。」
設楽七十郎は、空箱を一生懸命調べて居ります。
「それは存じません。」
「驚いたな、あッと言う間だ、――こんなことと知ったら、小僧などにからかっているんじゃなかった。」
今更そう言っても追付きません。

## 娘は伊太郎の家へ

近所の衆から届け出て、町役人、御用聞、定廻り同心など、後から後からとやって来ました。
お美乃と七十郎と伊太郎を証人に、一と通りも二た通りも調べましたが、何んとしても奇怪な殺しで、役人も見当のつけようもありません。
が、誰でも感じたことは、これが事件の全部ではなくて、これから大事件の起る発端ではあるまいか――という事でした。
箱の中の紛失した品や、剝がれた久助の皮が、何処で、どんな恐ろしい役目を勤めることか、全く常識も想像も絶したのです。
「兎に角、死体を持って行って、もう一度念入に調べるとしよう、この顔を見知りの者があるかも知れず、皮を剝いだ手際も見る者に見てもらいたい。」
役人がそう言うのも無理はありません。やがて吊台を用意して、死骸を持去ると、跡は惨憺たる乱闘の形見ばかり。
「私、どうしましょう。」
血腥さい空気の中に、お美乃は一と縮みに縮んで居ります。
「仏の戻るのは明日だろう。今晩はお通夜をしようにも、これでは何うにもなるまい。」
七十郎も持てあましました。変人の久助が、近所付合もよくなかったものか、血だらけの家のなかへは進んで入り手もありません。
「これは驚いた、先生のところへお美乃さんを伴れて行って下

さいな、明日になったら、何うかなるでしょう。」
と伊太郎。
「俺の家は遠いぞ、――その上、こう見えても一人者だ、若い女を泊めると世間がうるさい。」
「――――」
伊太郎は苦笑しました。若い女を泊めて、世間がうるさく言うような面ではありません。
「伊太郎、笑ったな。」
「いえ、何。」
「お前の家は直ぐ其処ではないか、幸い親父もいることだ、伴れて行け。」
「世間の口が――」
「真似をするな、女の子を掻きわけて歩くというお前じゃないか、たった一人の娘ッ子に驚くことはあるまい。」
設楽七十郎、すっかりそのつもりでした。戸締りをして、近所の衆へ頼むと、お美乃と伊太郎を促して、もう路地の外の月に立って居ります。
「先生は？」
「俺は竹町へ帰る。」
「それは約束が違やしませんか、暫らくあっしの家へ行って、泊って下さると、先刻仰しゃったばかりで。」
「いや、それは変替だ。若い女の子と同じ屋根の下では、俺は寝つけない性分でな。」
設楽七十郎、こんな事を言って嘯きます。
「驚いたなア。」
「俺のほうが驚くぞ――また明日逢おう。」
七十郎は、そのまま踵を返します。
「先生。」
「聞えぬぞ――酒も醒めた。呑み残りの冷酒が、帰りを待っている。」
「――――」
伊太郎は妙にほほ笑ましくなりました。物にこだわらぬ、設楽七十郎の寛濶さ、師匠だか友達だか、親父だかわからないような気持が、胸の底から親しみをこみ上げるのです。
が、振り返って、しょんぼりと月に濡れたお美乃を見ると、伊太郎の頬から、急に微笑は掻き消えます。
「おや？」
伊太郎の家の前まで来ると、中から激しい争いの声が、街のなかまでも聞えるのです。
小揚町の人足頭で、荒っぽい人間の出入も多い家ですから、こんなことには馴れた伊太郎ですが、今晩のは少し意味が違います。
父親の文七は、若い時は荒っぽい人間だったでしょうが、この二三年はすっかり老込んで、愚に返ったといおうか、仏心が出たといおうか、伜の伊太郎でさえ、歯痒いと思うようになっているのです。その父親が、紛れもなく人と争っていようとは、伊太郎、想像もつかなかったのでした。
万一、体も気も弱くなっている親父に、間違いがあっては、――と飛びこむ伊太郎。
「忘れるな文七、きっと思い知らせるぞ。」
捨台詞とともに飛出して、ハタと顔を合せたのは、蔵前の札差、田村屋の伜吉六です。
「――――」
二人は一瞬立ちどまりました。どちらも若い盛り、苦味ばしったのと、にやけたのと、皮肉で寛達なのと、柔和で陰険なのと、対照的な二人は、思わず敵意に満ちた眼を合せたので

す。が眼を反すと其処には、闇を彩るようなお美乃がしょんぼり立っているではありませんか、吉六は何んとなく驚きあわてて身を開きます。

「何んの用事だ。」

と伊太郎。

「親父に聴くが宜い。」

吉六は身を翻して街の闇へ——、其処には用心棒らしいのが二人、左右から、ッ、ッと吉六を挾んで、何処ともなく消え去ります。

## 相寄る若い魂

「こんなわけだ、父さん、見るに見兼ねて、伴れて来たのはこのお美乃さん——」

伊太郎は父親の前へ、お美乃を伴れてきて引合せました。

髪も衣紋の乱れも繕う暇もなく、心の動揺を押し隠す力もありませんが、その可憐な美しさは、さすがに文七の胆を奪いました。

粗末な木綿の袷も、赤い鹿の子の帯も、お美乃の身につけば、縮緬、繻珍も及ばぬ効果的な装いです。

それは決して、絵に描いたような美しさではありません、が、取立てて言うことのできない、不思議な魅力が、処女の五体から発散して、ただ夢心に人を包んで行くのでした。

「——」

文七は併し、驚きも、惧れも押隠して、黙りこくって居ります。お美乃の可愛らしさに打たれながらも、これが世にも不吉な前兆でもあるように、ただ、おどおどと眼を見張るばかりだったのです。

久助よりは少し老けて、五十三四にもなるでしょう。こんな家業の者に似ず、臆病らしくさえ見えるのは、長い間の苦難と、言うに言われぬ恐怖に付き纏われている為でもあったでしょう。

父親の打解けない顔を見ると、伊太郎は宜い加減にして立ちあがりました。

そっと小手招ぐと、跟いて来るお美乃。

奥の一と間へ案内して、行燈へ灯を入れようと思いますが、もう一度、父親の前へ帰るのも、何んとなく気がとがめます。

ようやく捜し出した火口と燧石。

カチ、カチ、カチと鎌を鳴らしますが、心が落着かぬせいか、どうしても火が付きません。

「私がやって見ましょう。」

そッと柔かい処女の手。

髪の匂いが鼻をかすめると、続いて、硫黄の臭気が、プーンと闇に漲ります。

灯はようやく点いたのです。

「伊太郎さん、先刻の人は、田村屋の吉六でしょう。」

「そうだよ。」

「この間から私の家へも来て、父さんへ何か言っていました。」

「——」

「それから私にも、怖い、嫌な人。」

伊太郎の胸には、憤怒がコミあげます。

「——」

「此処へも姿を見せるようでは、この先どんな事をするかわかりません、私は、私は。」

「――――」

親のない娘は、不思議な恐怖の直感に身をふるわせるのです。

「独りで、あの家へ帰っていなければならないのでしょうか、――あの吉六の眼が、障子の穴からでも隙間からでも、天井裏からでも、何時でも私を見ているような――」

「馬鹿なことを。」

伊太郎は笑って紛らせました。が、処女の恐怖は、思いの外に根強く、胸の奥深く喰い入っている様子で、そんなことには慰められそうもありません。

「何うしましょう、伊太郎さん。」

「心配するな。」

伊太郎は誘われるように、こう言い切りました。

颯ッ――と吹く風の声。

「あれ――ッ、誰か。」

お美乃は一とたまりもなく、伊太郎の胸に飛びつきました。

「驚くな、風だ。」

「いえ、あの眼、――青い火の燃えるような吉六の眼。」

「――――」

振り返ると成程、誰の仕業か、縁側の戸がほんの少し隙いて居ります。

「伊太郎さん。」

「――――」

男の胸に顔を埋めて、ワナワナと顫える処女――。

この繊弱い処女を繞って、なんという恐ろしい事件が襲い来ったことでしょう。あれからほんの二刻か三刻の間に、この処女は天涯頼るところのない孤児になり、父親の死体は傷けられ、秘密をかくす箱は開かれ、怪盗と、妖婆と、悪少年と、それから情怨の眼が、四方八方から襲いかかっているのです。

何が何やら少しもわかりません。が、その混乱と妖気の渦巻く事件の発展のなかに、思いもよらぬ可憐な処女が姿をあらわして、女嫌いで通した伊太郎の胸の奥に、不思議にも生温かい感情が芽生えたことだけは、一番明かで、一番重大な事件のような気がするのでした。

二人はほんの暫らく、黙りこくって居りました。その間に将軍が二三代変って、閏月が十五六回あったような気もしますが、行燈の丁字もたまらず、親父の吐月峯を叩く音もしなかったところを見ると、ほんの一瞬転の出来事だったかもわかりません。

「誰だ。」

伊太郎はそう言いながら、照れ隠しに、雨戸を引開けました。

青葉の匂いがプーンと漂う闇の庭、其処には誰も居りません。

## あッ遺書！

「伊太、ちょいと来い。」

お美乃を落着かせて、元の部屋へ引っかえすと、親父の文七は、長火鉢の前を煙管で指すのでした。

「なんだえ。父さん。」

「これは言いたくねえことだが、――あの娘と因縁が絡んじゃ、面白くねえことになりそうだ、――今晩と言うは無理だろうが明日は門前町へかえして、この後は振り向いても見ちゃアならねえ。」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com